

2019 年 11 月 3 日（日）「闇は光に打ち勝たなかった」

マタイ 26:47-56

47 イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二弟子のひとりであるユダがやって来た。剣や棒を手にした大ぜいの群衆もいっしょであった。群衆はみな、祭司長、民の長老たちから差し向けられたものであった。48 イエスを裏切る者は、彼らと合図を決めて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ」と言っておいた。49 それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で」と言って、口づけした。50 イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか」と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕らえた。51 すると、イエスといっしょにいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに撃ってかかり、その耳を切り落とした。52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」55 そのとき、イエスは群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしをつかまえに来たのですか。わたしは毎日、宮ですわって教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえなかったのです。56 しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書が実現するためです。」そのとき、弟子たちはみな、イエスを見捨てて、逃げてしまった。

【序論】

聖書という書物は、そこに描かれている物語は同じであっても、読む人（聞く人）の受け取り方によって、まったく違った結果がもたらされるものです。それは、福音を聞き取れるかどうかと言ってもよいでしょう。今日のユダの裏切りの記事におきましても、出来事の表面だけを見れば、ある宗教教祖が活動に失敗して捕縛されただけと取られるかもしれません。しかし、私たち信仰者にはそのような読み方はできないのでありまして、この事件の背後に隠された霊的真理——主イエスの中、あるいはそこに居合わせる人々の間で繰り広げられている激烈な霊的戦いを読み取らなくてはならない。それは偏に主イエスとサタンとの戦いと言ってもよいでしょう。別の見方をすれば、神の計画と人の罪の関係とも言えます。そして、この物語が私たち読者とどう関係わっているのか、私たちは登場人物の誰に属するのか（似ているのか）を考えなくてはなりません。

【本論】

本論 1. ユダの裏切り

イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二弟子のひとりであるユダがやって来た。剣や棒を手にした大ぜいの群衆もいっしょであった。群衆はみな、祭司長、民の長老たちから差し向けられたものであった。(26:47)

ゲッセマネでの祈りを終え、眠っていた弟子たちを起こし、「さあ、行こう」と声をかけた矢先の出来事でした。十二弟子の一人であったイスカリオテのユダを先頭に、物騒な群衆が姿を現しました。オリーブの木に囲われた薄暗い園に、松明を手にした人々が入ってくる。弟子たちは恐怖に駆られたことでしょう。気づいたら敵に囲まれていた。逃げ道が塞がれていたのです！

群衆を先導しているのは「十二弟子のひとりであるユダ」であったと、ご丁寧な説明があります。「え？あのユダが？なぜ敵の側にいるんだ？」と、弟子たちには状況がすぐには飲み込めなかったことでしょう。それほど、ユダはつい先程まで「仲間」として一緒にいたのであり、共に過越の食事を食べた^{ともがら}輩 だったのです。「十二弟子のひとり」という説明句には、他の弟子たちの衝撃の強さが表されている。

ここに登場する「群衆」は、サンヘドリンから派遣された人々で、神殿警備隊、警察の分遣隊のような役割を担った人々だったと思われます。ルカ 22:52 によると「祭司長、宮の守衛長、長老たち」もいたようで、その集団の先頭には「大祭司のしもべ」がいました(26:51)。

イエスを裏切る者は、彼らと合図を決めて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ」と言っておいた。それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で」と言って、口づけした。イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか」と言われた。

そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕らえた。(26:48-50)

敵の目標は主イエスただ一人。暗闇で見誤らないように、ユダは合図を決めておきました。自分が口づけする相手がその人だと。「口づけをする」という動詞は「φιλέω」(フィレーソー)という言葉で、「フィレオー」(友愛)を思わせます。「愛しています」「尊敬しています」という気持ちを表す行為であり、ユダが日頃から主イエスに対して行なっていたものと思われます。そして、ここ裏切る場面でも「いつものように」これを行なう。しかも、49 節ではよりネチっこい言葉「καταφιλέω」(カタフィレオー)が使われており、何度も激しく接吻したことが見受けられます。ユダは「愛の行為」をもって主イエスを裏切ったのです。

「お元気で」と訳された言葉（Χαίρε）の元々の意味は「喜んでください」であり、ユダの中での著しい言行の不一致を表しています。裏切られ、捕えられることを喜べと言うのか！それに対する主のことば（友よ。何のために来たのですか）もやや謎めいており（直訳：「あなたは何のためにここにいるのか」）、様々な訳の可能性があります¹。私は、この主のことばの中に「あなたはどこにいるのか」という、道に迷う者に対して声をかける神の御声が聞こえてきました（創世記 3:9）。主はここでもユダに対して「友よ」と呼びかけておられる。ユダの心のすべてを知りながら、尚も彼を愛し、彼が陥っている恐ろしい現実気づかせようとする。叱責されたり、嫌味を言われたりするより、愛の言葉を投げかけられる方が堪えるでしょう。主はここに至ってもユダに立ち返る道を残しておられるのです。

本論 2. 贖いを妨げる弟子たち（剣は真逆の道）

すると、イエスといっしょにいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに撃ってかかり、その耳を切り落とした。（26:51）

さて、ここから事態は激しく動き出そうとします。居合わせた弟子たちが抵抗を始めようとするのです。ルカ 22:49 には、主イエスを取り巻いていた弟子たちがこぞって戦おうとしていたように書かれています。その中の一人がいきなり持っていた剣（ルカ 22:36）で先頭の男に斬りかかりました。ヨハネによると、それはペテロであったようです（ヨハネ 18:10）。そして、斬られた人の名前は「マルコス」であったことも分かっています。マタイはどのようにして名前を伏せているのか。それは、マタイ福音書が書かれた時代にはまだペテロは生きていたので、名前を出すことが危険だったからでしょう。現代では SNS に写真を載せる場合でも、他人様の顔を分からなくするのがマナーです。これは、個人のプライバシーを守るための配慮であり、幾分似ているように思います。もしここでペテロの名前が出てしまうと、彼は殺人未遂の容疑で捕えられたかもしれません。

そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとでも思うのですか。だが、そのようなことをすれば、

¹ 「しようとしていることをするがよい」（新共同）

「あなたがしようとしていることをしなさい」（新改訳2017）

「なんのためにきたのか」（口語）

「このために来たのか」（高橋）

こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」(26:52-54)

この主のことは、主が「捕えられる」のではなく、むしろご自分の意志で神の御旨に従って「捕えられに行っている」ことを言い表しています。この出来事を表面的に見れば、イエスは何の抵抗もできずに、敵になされるがまま、敗北の道筋を辿っていったかのように見えるでしょう。しかし、主は逃げようと思えば逃げられたし、戦おうと思えば戦えた。それも、神の子の権限により、おびたしい天の軍勢によって、目の前の敵を蹴散らすこともできたのです。しかし、主はそれをなさらない。粛々と悪しき者に自分自身を差し出すのです。それは、闇の力によって神の子が殺されることこそが、父なる神様の御旨であることを知っていたからです。そのようにして死ぬことが、多くの人の贖いの代価となることだと、主はゲッセマネの祈りを通して確信したのです。よって、主イエスにとっての勝利とは、暴力によっては得ることができなかった。主は父なる神様に徹底的に聞き従い、「犠牲の小羊」になることにより、勝利者とならなくてはなりませんでした。

すると、剣をもって戦いを始めようとした弟子の行為とは、あまりに不適切なものであるということになりませんか。彼は主イエスのために戦おうという気概をもって敵に立ち向かっていきましたが、それは暴力をもって暴力に立ち向かう「この世の原理」そのものであり、主イエスが果たそうとしている神の国の全き平和の原理と真っ向から対立するものだったのです。この弟子の護衛は、一瞬主イエスにとって誘惑となったかもしれませぬ。自分のために戦おうという弟子たち。頼もしいではないか！やはりここは自分が本来もっている力により、敵を蹴散らしてやろうか。しかし、もし主がその道に進んでしまったとしたら、神の贖いのご計画は成就しなくなるのです。だから、主はその弟子に言われた。「剣を収めよ」と。「わたしは父の御心を行なうため、旧約聖書の預言を成就するために、十字架に向かっているのだ。その道を妨げるな」と。主のために剣を振るった弟子は、知らずしてサタンの側についていたのです。

本論 3. 人の罪と神の計画

そのとき、イエスは群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしをつかまえに来たのですか。わたしは毎日、宮ですわって教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえなかったのです。」(26:55)

主イエスは一転、弟子たちから群衆に向き直り、彼らの罪を暴きます。こんな闇夜に紛れて行動しなくとも、主はずっと公然と神殿で教えていたのだから、白昼捕えることなどいつでもできたはずだ。では、なぜ敵どもはそうしなかったか。それは、民衆を恐れ

たからです。主イエスを訴える明白な理由がないから、堂々と逮捕することができなかったのです。闇夜に紛れて行動するところに、彼らの行為が「闇の業」であることが言い表されているでしょう。主は彼らの行動をそのように断罪されました。主イエスのこの堂々とした態度をご覧ください。光が闇に打ち勝っているのが見て取れませんか。霊の眼を開いて見るとき、神の義の勝利が見える。主イエスが人の心を見抜き、実はこの状況のすべてを支配し、その上でご自分を能動的に悪の手に委ねていく姿を見るのです。そして、主は言われます。

しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書が実現するためです。(26:56a)

主イエスは神のご計画に従ってご自分の一切の行動を決定している。しかし、そこには確かに人間の罪が作用してもあります。ここに一つ、難しい問題がある。神の計画と人間の罪の関係です。神のご計画を妨げることのできる者はいない。しかし、神は人間に自由意思を与え、その行動に制約をもうけてはおられないのです。人間は思いのままに行動し、罪を犯す。神の御心に背くことを行なう。イスカリオテのユダは神の子を裏切りました。ペテロは剣を抜いて敵に斬りかかり、およそ「主の弟子」にふさわしくない行動をしました。そして、主イエスを捕縛する者たちは、闇の会議によってこのことを決定しました。人間の罪に基づく行動が複雑に絡み合いながら、主イエスを十字架に送っているのは事実なのです。しかしながら、それらすべてのことを通して、神の御心が実現していく。その御心が実現するためには、主イエスの正しい判断も同時に伴っているのです。

そのとき、弟子たちはみな、イエスを見捨てて、逃げてしまった。(26:56b)

今日の箇所は、弟子たち全員の逃亡という、惨めな記事でもって終わります。このことすら、主イエスは予告しておられた。そして、それも預言者が語っていたことの成就だと言われるのです。

剣よ。目をさましてわたしの牧者を攻め、わたしの仲間の者を攻めよ。——万軍の主の御告げ——牧者を打ち殺せ。そうすれば、羊は散って行き、わたしは、この手を子どもたちに向ける。(ゼカリヤ 13:7)

主イエスが捕縛された今、弟子たちにはなす術がありませんでした。主イエスに対して抱いていた期待、メシヤとしてイスラエル王国を再建してくださるという淡い期待は打ち砕かれたのです。主の受難の意味を理解している者は一人もいませんでした。「犠牲の小羊」として十字架に向かわれる主の意志を理解できなかった。弟子たちに残された道は、逃亡以外にありませんでした。主イエスはいよいよ、たった一人で最後の試練に立ち向かうことになります。一人(弟子たちの支えなく)で法廷に立ち、一人で鞭打たれ、一人で十字架にお架かりになるのです。

【結論】

今日の記事の裏側に隠された霊的戦いを少しでもお伝えできればと願いながら、このメッセージを準備しました。そして、主が誰のために戦われたのかということ、最後に心に留めたいと思うのです。それは、無理解な弟子たちのためであり、主を捕えに来た悪しき群衆のためであり、卑劣な裏切りを達成したユダのためでした。主はこれらすべての人々の救いのために戦われた。そして、私たち読者のためでもあります。ここに登場する人々は、私たちにとって「他人」ではありません。生まれながら闇の内を歩むすべての人間の姿がここに描かれているのです。ゲッセマネの闇、主イエスを囲う闇は、私たちの闇です。しかし、その中に一点の光がありました。主イエスという光です。この光によって、私たちは光の子とされたのです。

光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。(ヨハネ 1:5)

【祈り】

光なる神よ。あなたの内には一点の影もありません。あなたこそ、すべての真実を知り、人の世の闇を照らすまことの光です。この世は一見、悪が支配しているように見えますが、すべてのことを働かせて益となし給う神の統治の下にあります。主イエスの十字架こそ、その証でした。主よ、私たちも生まれながらにして闇の内を歩んでおりましたが、今は光の子とされました。そして、この身分をいただいた者として、あなたの聖なる御業の一つ一つを霊の目で見出しく願います。あなたの許にこそ最善の御旨があることを信じます。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、

聖き計画の下に、人の自由なる意思を働かせ給う、父なる神の愛。

ただ一人闇の勢力と戦い、神への全き従順をもって勝利を治め給うた、主イエス・キリストの恵み。

信者の霊の眼を開き、すべての悪を凌駕する神の御業を見せ給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。